

桐鳳凰文蒔絵唐櫃・桐唐草文蒔絵唐櫃

足付きの櫃は唐櫃（「中国風の収納箱」の意）と呼ばれる。これは地面に直に置かれる足のないものと区別される。この櫃は秀吉の私物を保管するために使用された。非常に豊かに装飾が施されたこれらの櫃は、平蒔絵（高台寺蒔絵ともいう）という技法が使われている。これは金粉や銀粉を黒漆の上から振りかけたり、埋め込んだりする技法である。この櫃からは、秀吉（1537-1598）が派手な芸術を好んだことが伝わってくる。鳳凰と桐の文様は、国を統一する指導者が現れるときに鳳凰が現れて桐の実を食べると言い伝えと関係があり、縁起の良い組み合わせとされている。秀吉にとって桐は家紋でもあるので、特にふさわしい文様になっている。この2つの櫃と、それとセットになる京都国立博物館収蔵の3つ目の櫃は、重要文化財に指定されている。これらの櫃の中に入れられていた品物の目録が残っており、秀吉が日常的にどのようなものを使っていたのかが良くわかる。渦巻き状の花柄である唐草文様の櫃は、秀吉自身が使っていたものとされている。